

(2) 小学校の特別支援学級における自閉症スペクトラムの児童への構造化による支援について

—「ワーク・システム」の有効性の検証—

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 池田 敬子

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 小林 信篤

【要 旨】

2007年4月から、今までの「特殊教育」の対象者を含め、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)等の児童に対しても「特別支援教育」が開始されている。今日、自閉症スペクトラムの教育支援の方法としてTEACCHプログラムが成果をあげており、個別的な配慮への対応に有効とされている。

そこで、学習時間にTEACCHプログラムにもとづく構造化による指導法の一つである「ワーク・システム」を使って、児童が「自立して」活動できるように実践的な場面を創出し、個別的な指導時間を確保する取り組みを通して、ワーク・システムの有効性を検証することを目的とした。

研究対象者は、広汎性発達障害の診断を受けている1年から6年までの多学年にわたる小学校の特別

支援学級の児童7名である。学習時間における児童の行動観察から障害特性の理解をし、教師の取り組みを評価した上で、ワーク・システムを導入し、その成果を評価する。必要に応じて再構造化し、改めて評価することを繰り返し行う。児童の自立的な学習の推移と個別的指導の時間の確保の推移とにまとめて考察する。

自閉症スペクトラムの障害特性にもとづき、教師が、学習する課題の提示の仕方や手順を整理してワーク・システムを使って学習することを支援した結果、児童は、学習時間の初めから終わりまでの一連の活動を自立して行えるようになった。このことから、個別の教育的なニーズに応え、新しい学習内容を指導する時間を確保することが可能となり、ワーク・システムは有効な教育支援であると言える。